延宝の角太夫

――『石山開帳』と『石山後日　れんげ上人』――

沙加戸弘

はじめに

延宝期、真宗関係浄瑠璃は多岐にわたる展開を見せた。本稿では、山本角太夫がこの時期新しく本願寺八代蓮如兼寿の伝を上演したことを述べ、併せてこの挙は本願寺門徒の蓮如讃仰の気運に乗じたものであることを明らかにしたい。

土佐掾山本角太夫は、延宝期から元禄期にかけて京都で活躍した太夫である。延宝五年閏十二月受領して相模掾を名乗り、後土佐掾と改める。従って、本稿に関わる時代は角太夫と相模掾にまたがっているが、煩雑になるため通して角太夫の名称を用いることとする。

一、『石山開帳』

延宝五年四月、山本角太夫は『江州杉山兵衛国替　付り石山開帳之事』と題する一作を上演した。この作は、前年延宝四年三月の石山寺の開帳をあてこんで宇治加賀掾が上演した『江州石山寺　源氏供養』に対抗したもの、と考えられるが、好評を博したものと見え、幾種類かの版が残っている。

現在この作は、『石山開帳』の名称で『古浄瑠璃正本集　角太夫編　第一』に収録されているので、この稿でも『石山開帳』の名称を使用する。

この『石山開帳』は、杉山兵衛とむめがきけんもつとよ

しげとの争いに端を発する、仇討ちと発心の物語であるが、主題は石山観世音の霊験譚である。

概略を記す。

第一

室町三代将軍家満の代、寵臣にむめがきけんもつとよしげがいた。とよしげの言上により、江州高島の杉山兵衛のぜう国みつは筑紫へ国替になる。逆恨みをした杉山兵衛は筑紫へと下る途次、藤の森においてとよしげと行き会い、とよしげを討ち果たし、筑紫へは行かずに紀州藤白に誼を頼って落ちのびる。

第二

国みつは仮名を替え、藤白の母方の伯父の由緒を横領して十七年になる。紀州和歌の浦にはとよしげの一子権太郎とよはるが七十に余る老母を養い暮らしている。とよはるは慈悲第一にして石山の観音を深く頼みとしていた。その暮らしを見た汐汲海女の一人が共に老母を養わんと申し出、女房となる。とよはるには一子とよ若が誕生する。ある日とよはるは山中で、鶴の巣ごもりをとろうとする勢子を留め鶴を助ける。勢子は国みつの手の者であった。とよはるは捕えられ、首打たれる時身上を語り、国みつは自らをねらう討手を捕えたことを喜ぶが、先程助けた鶴がとよはるを運び去る。

第三

とよはるの女房は、とよはるが捕われて討たれたと聞き、一人で国みつの館へ行き奉公を申し出る。その色香を愛でて、国みつは酒宴を催しくどきかかる。鶴はとよはるを国みつの館の庭へと運んでくる。とよはるは国みつが女房の膝を枕にしているのを見て、女房の心変わりかと悲嘆にくれるが、頃合いよしと女房が国みつに斬りかかるを見て誤解を解き、共に国みつを討ち果たす。

第四

とよはる夫婦は老母とよ若共々に和歌の浦から落ち、和泉の国佐野の里に辿り着く。糧尽きた夫婦は女房の乳を老母にすめる。老母は一旦は服するが、みどり子をいとえと再びは服さない。思い余った夫婦は老母への孝と、とよ若を池に沈める。事態を知った老母は自らも身を投げようとするが、夫婦に留められる。そこへ、和泉の国貝塚の上人が観音の告を蒙って来る。事の次第を聞いた上人は、この里の池の辺に一人のみどり子がいるのでそのみどり子を拾い師弟の縁を結べ、

そのみどり子こそ善知識に疑いなしとの観音の霊夢にまかせてここに来た、と語る。上人はとよ若を弔おうと観音を念ずる。すると虚空に音楽が聞え異香薫じ池の蓮が開花する中に、池中より白蓮華が出現する。白蓮華が開くと中にとよ若が微笑しつつ座している。貝塚の上人はとよ若の名をれんげ丸と改め、親子四人を寺に伴う。

第五

れんげ丸が十五歳に成長した時母は、「我人間にあらず、汝を仏道に引導せんため仮に人間とあらわれたのである。父もろともに仏道に心をそめ、後の世を願え」と夢の中に告げて寺を出る。とよはるも同じ夢を見、このことを上人に告げたところ上人は、母上は観音の化現に違いないと二人を出家させ、とよはるの名をほうじゅん、れんげ丸の名をれんげ坊と改めた。其後、ほうじゅんれんげ坊は共に諸国修行に出、志賀の里に着く。折から、とよはる夫婦に討たれた国みつの弟国長が来合わせる。れんげ坊は、師伝の六字の名号を松に懸け合掌して首打たれることになる。国長がれんげ坊の首を斬ると、一旦首は落ちるが宙に上がり蓮華となってその中から首が現れ、れんげ坊の体につながる。同時に、六字の名号の南の字が消える。斬り損じたかと今一度国長が首を打つと、同じように首は元通りとなり、名号の無の字が消える。消えた二字のあとから血が流れる。この奇瑞に国長は発心し、れんげ坊の弟子となる。三人が石山寺に参詣すると、幼き者の衣裳が御帳の扉に懸かり、出居には女性の草履がそろえてある。衣裳はれんげ坊の産着であり、草履は母の用いた物であった。寺僧は何も知らぬと言う。その時、御帳の扉が開き、観世音がれんげ坊の母の姿で現じ、一切衆生を済度せよと示す。とてもの事に正真の御姿を拝したい、とれんげ坊が願うと、一旦扉は閉じ、改めて観世音が金色の姿を現す。れんげ上人の母上が石山寺の観世音であることは明らかである。其後、れんげ上人は衆生済度なされ、仏法は今に繁盛、有難きことである。

大略で明らかなとおり、この中で一番重く取り扱われているのが、むめがきけんもつとよしげの孫、とよ若である。とよ若は後にれんげ丸と名を改め、出家してれんげ坊となり、一曲の最後にはれんげ上人と呼ばれる。このれんげ上人、という名には含むところがあるように見受けられる。

とよ若は、とよしげの孫、とよはるの子、であるが、と

よ若の母すなわちとよはるの妻は、石山寺の観世音の化身である。一曲ではまず、

しかるにとよはるはじひ第一の男にて。つねにいしやまにあゆみをはこび。ねびくはんおんのちからを持敵をうたんと思ひつゝ。あかしくらさせ給ふ所に。

（第二）

と、とよはるが石山寺の観世音を深く頼みとしていたことが語られる。

とよはる夫婦は首尾良く仇を討ちとるのであるが、その後縁を得て貝塚の上人と出会い、とよ若はれんげ丸と名を改めて、貝塚の寺で成長する。

れんげ丸十五歳の秋、母は、

ある時若君は御心やつかれけん。少シまどろみおはします。しかる所に母上は若君のまくらもとに立給ひ。いかにれんげ丸。ちうやがくもんおこたらずぶつだうをねがふ事。かへすゞもうれしけれ。みずからおことが母なれ共まさにんげんにあらず。汝が父のとよはるはようせうにておやをうたせ。あけくれ敵をうたせてたべと我にきせいをかけまくも。ぐちのぼんぶをすくはんため。又はおやにかうある心をかんじ。かりにんげんとあらはれふうふいもせのちぎりをこめ。ねがひのごとく敵をうたす。是むくひのごうをはたしぶつちにいんだうなさせんためのはうべん也。おことも父もぶつだうに心をそめ。後の世ばねがふべし。又こそめくりあふべし

（第五）

と、夢の中に告げて行方しれずとなる。母は観世音である、と自らつげていることになる。このことを機縁としてれんげ丸は出家してれんげ坊となり、同じく出家してほうじゅんと名を改めた父と共に、諸国修行の旅に出る。

志賀の里において、自らを仇とねらう国長と出会ったれんげ坊に奇瑞がおこり、国長は発心して三人共々に石山寺に参詣する。

時にふしぎやいづく共なくおさあいのいしやう一つとびらにかゝり。又女性のざうりぬぎ置でいにそろへて有にけり。人々是はと心をとめ。立よりて見給ひける。時にほうじゅんいかにれんげ坊。此うぶきぬはおことといとけなき時。御身が母のしつらひてきせたるいしやうにうたがひなし。又ざうりにも見所有。いかさまふしぎ是はれず。

（第五）

と場面は展開し、さらにれんげ坊は正真の観世音の御姿を拝して、

扨こそれんげ上人の御母上は。石山の観世音にてまし

ますと。まつだい迄もかくれなし。　（第五）

としめくくられている。

本願寺蓮如の母が石山の観世音の化身であり、蓮如六歳の年の暮、蓮如を残して本願寺を出て行方しれずとなった、出る時に蓮如に鹿子の小袖を着せて絵師に写させ、それを持って出た、という伝承は公刊されたものでは後に触れる『蓮如上人御物語』が最初であるが、中世末期に成立した『拾塵記』あるいは『蓮如上人御一期記』に既に見えるので、真宗道場における法座を通して門徒の人口に膾炙したことは想像に難くないところである。

このれんげ上人が本願寺蓮如の俤を写している、という色合いはこの後日譚である『石山後日　れんげ上人』で非常に濃くなる。この背景に『蓮如上人御物語』の刊行があった、と考えられるのである。

二、『石山後日　れんげ上人』

『石山開帳』上演の直後、すなわち延宝五年丁巳五月中旬、川勝又兵衛尉より『蓮如上人御物語』が刊行された。角太夫の『石山後日　れんげ上人』の上演はこの『蓮如上人御物語』の刊行に促されたと考えられるので、上演は『蓮如上人御物語』の刊行をさほど降らない時期、すなわち延宝六年前後と推定される。

次に一曲の大略を記す。

第一

中興開山善知識れんげ上人の母上は、石山の観世音である。上人七歳の御年母上は行方不知となられた。御成人の後上人が石山寺に御参詣なされた時、上人の産衣が御帳に懸かっており、母上が御帳の内から示現なされた。以後上人は観世音を母上と思召して、善知識の跡を継ぎ、他力易行の念仏を広め、貝塚の御堂で衆生済度なされている。上人の御弟子の中に、杉山兵衛のぜう国みつの弟国長がいる。国長は発心して、今れんじゅんと名を改めている。れんじゅんは、兄の十三年を期して紀伊の国に立ち帰る。紀伊の国には、国長の母方の伯父でありかつ育ての親であるあかほり弥七兵へ時村がいた。国長は時村の娘まさごの前をめとり、一子はつ若をもうけていたが、妻子をおいて仇討ちに出、仇討ち転じて発心となったのである。国長は時村の館に入り経緯を語るが、時村は発心した国長を叱責し、妻子も仇を討ってほしいと懇願する。やむを得ず国長は還俗し、上人を討つと誓約、兄国みつの十三回忌を勤めるという口実で上人を呼び寄せ討つ手筈

を整える。館に入った上人が勤行すると観世音菩薩が影向し、上人を蓮華にすくいとり虚空に揚げる。押し入った国長はこの奇瑞に驚き再び発心、上人と共に貝塚の寺へと急ぐ。

第二

時村はこの経緯を怒り、郎党を催し貝塚の寺へ押し寄せようと準備するところへ、国長が立ち戻り時村をいさめるが時村は全く聞き入れない。国長は立腹して立ち去る。時村は、まず国長を討とうと準備する。国長は妻子を時村の許へ帰そうとするが、妻子は聞かない。そのうちに時村が押し寄せて来る。国長は獅子奮迅、時村を追い返す。

第三

国長は書置を認め妻子をおいて一人立出、貝塚の寺へと戻り、上人に請うて再び出家となり、諸国修行の旅に出る。上人は開山聖人御自作の御影の告によって、三日三夜まきのお寺に参詣する。時村は郎党を引き具して貝塚の寺に押し寄せ、内陣で念誦する僧を搦め取り山中で斬りつけるが、それは木像であった。腹立ちにまかせてさらに木像に切りつけるが、数多の切目からは血が流れ出る。落ちた木像を追って谷に下りた時村と郎党は悪獣に食われる。上人はまきのお寺からの帰途山中で乞食人に会い、乞われるままに召替の小袖を着せ、背負って寺に戻る。留守中、御影が奪い去られたことを聞いた上人は、大切な御影であるから尋ねようとし、乞食人を背から降ろしたところ、乞食人と見えたのは御影であった。上人は、重ねて賊の来ることを案じ、御影と共に寺を出て諸国を巡る。

第四

国長の妻まさごの前は、一子はつ若を伴い、貝塚の寺を訪れるが、上人も国長もいない。母子は国長をたずねて東国へ下る。駿河の大河でまさごの前は盗賊に拉致される。残されたはつ若はれんげ上人に助けられ母を追う。とある辻堂でれんげ上人とはつ若はまさごの前を連れ行く盗賊に追いつき、辻堂に居合せた国長入道れんじゆんと不思議の再会をはたし、れんじゆんは盗賊を追い払う。

第五

上人、れんじゆん、まさごの前、はつ若は連れだって石山寺へと参詣する。上人は石山寺の観世音を母と拝し、感涙に袖を絞る。その時御厨子の錠が外れ扉が開き観世音の示現あり、れんげ上人は当二月二十五日

に極楽往生とげしむべし、と告げる。上人は御開山の御影に御暇乞い申し、れんじゅんに後を託してことばを遺し、二十五菩薩の来迎を受けて、蓮台から弘誓の舟に乗じて往生を遂げる。

重複になるがこの『石山後日　れんげ上人』は、

そも〳〵一かうせんじゆねんぶつの一りう。をよそ日本六十よしうすみやかにひろめさせ給ひしは。ちうかうかいさんぜんちしきれんげ上人の御ゆいくんにあり。かたじけなくも此上人の御母はがうしう石山のくはんぜをん。そくげんふによしんのきずいをあらはしまふけ給ひし御子なり。されば上人七才の御とし御母うへゆゑなくうせさせ給ひ。其後上人御せいじんのいご石山にさんけい有しに。上人の御うぶきぬとちやうのうへにかゝりしを御ふしんなさせ給ひしゆへ。一たびわかれ給ひたる御はゝうへみちやうの内よりあらはれ出させ給ひ。それよりくはんぜをんぼさつを御母うへとしろしめし。いよ〳〵ほつしんけんごぜんちしきの御あとをつがせ給ひ。たりきいぎやうの御ねんぶつ。今にたへせぬいづみの国。かいづかの。みだうにして。しゆじやう。さいどなされける。

と始まる。この冒頭「一かうせんじゆねんぶつの一りう。をよそ日本六十よしうすみやかにひろめさせ給ひしは。ちうかうかいさんぜんちしきれんげ上人の御ゆいくんにあり。」の一文は、『蓮如上人御物語』の冒頭をそっくり写している。『蓮如上人御物語』には、

夫先師蓮如上人ハ親鸞聖人ヨリ法流御相続八代目ナリ凡日本六十余州スミヤカニ一流ヲヲシヘタマフ事　此上人ノ御遺訓ニアリ　シカアレハ中興上人トソ申タテマツリケル　（一・オ）

とある。また、その母についても、

スナハチ六歳ト申ス時　御母　若公ノ寿像ヲカヽセテ表補絵マテサセラレトリタマヒ　我ハコヽニアルヘキ身ニアラストテ　オナシキ御宇応永廿七年十二月廿八日ノ暮方ニ　我ハ西国豊後ノ国ノモノナリトオホセアリテ　ツレサセ給フ人モナクタヽヒトリ座敷ノウシロノ妻戸ヲヒラキ出給フト見ヘ侍リシガ御行方シラストナレ　不思議ナリシ事トモナリ　サテ其後　アル人近江ノ石山ノ観世音堂ヘマイリタリシニ　内陣ヲノソキケレハ　布袋若公ノ寿像カヽリタマヒシヲ見奉リ　驚不思議ニオモヒ寺家ノ僧ニ近ツキヒソカニ尋申セシニカノ御母儀東山ニマシマセシシホトハ石山ニハ観世音菩薩モオハシマサスト見奉ルヨシ　支証ヲイロ〳〵語

リ侍ルトソ申ケル　誠ニカノ御母儀ノ御方ハ疑ナク観世音菩薩ニテワタラセ給フコト各カタリアヒケルニ人々タシカニシレルコトナリ　（一・ウ～二・ウ）

と記されている。

さらに展開中、れんげ上人の寺を時村が襲い、結果れんげ上人は開山聖人の木像と共に寺を出て諸国を巡る、という一段は、寛正六年比叡山の僧徒が本願寺を破却し、蓮如は親鸞の御影と共に近江湖南の各地に難を逃れた、という史実と符合する。

今一点、れんげ上人の往生の場面にふれておく。れんげ上人は往生に先だって、

すでにはや御わうじやうの日げんほどちかく成しかは。上人いでさらばつね〳〵身をはなさずもり奉りし。御かいさんのみゑいに御いとまごひ申さんと。やがてみゑいのまへにむかはせ給ひ。しばらくらいはいまし〳〵。誠にぐそうありがたくもそしかいさんの御一りう。たりきいぎやうの御念仏あまねくひろめ大ぐはんじやうじゆいたせしゆへ。おつつけわうじやういたし候。かならずごくらくにて御めにかゝり申べしと。御やくそくまし〳〵。　（第五）

と開山聖人への暇乞をするが、これも『蓮如上人御物語』そのままである。

一同日開山聖人へ御暇乞ニ御参有ヘキト御行水アリテ御衣装ヲアラタメラレ　手輿ニテ阿弥陀堂ヘ御参　則本尊ニ御向アリ　何ヤラン御申アルト覚ヘテ　シハシ仏前ニマシ〳〵　サテ東ノ縁ヘカキ出スヘキ由仰侍ル花ノ咲タルヲ御覧アリ　面白シトテシハラク御覧セラレキ　庭ヨリ御影堂ヘアカラセラレオモテヨリ手輿ナカラ内陣ヘカキ入奉ル　開山ヘ御申シアリケルハ　極楽ヘマイル御暇乞ニテマシマス　必浄土ニテ御目ニカヽリ申スヘク候ト　タカラカニ御申アリケレハ　数万ノ人々一同ニ涙ヲナカシ随喜尊敬カキリナカリケリ　（三十三・オ～三十三・ウ）

さらにれんげ上人は往生に際して側の人々に言葉を遺す。

上人其外のみてしへも。それ〳〵にかたみを給はり。いよ〳〵念仏つとめ給へは。かいさんの一りうもいよ〳〵はんじやういたすべし。もろ〳〵のざうぎやうをすてゝ。しやうぎやうにきし。みだによらいを一かう一しんにたのみ奉らば。其しん〴〵のしゆじやうを。あまねくくはうみやうの中にせつしゆして捨給ずとの御せいぐはん。たつとみてもなをあまりあり。いよ〳〵しん〴〵けんごにてさとりのみちに入給へ。

（第五）

この文中の「もろ〳〵のざうぎやうをすてゝ」あるいは「みだによらいを一かう一しんにたのみ奉る」、はたまた「くはうみやうの中にせつしゆして捨給ず」等の表現は、人口に膾炙した蓮如の『五帖御文』の常套句である。例を挙げておく。

もろもろの雑行をすてて、一向一心に弥陀をたのまん衆生を、たすけずんばわれ正覚とらじ、とちかひ給ひて、　（五帖目、第八通）

もろもろの雑行をすてて、うたがひなく、一心一向に阿弥陀仏をたのみたてまつるこころなり。　（五帖目、第十一通）

そのゆへは、もろもろの雑行をなげすてて、一心に弥陀に帰命すれば、　（五帖目、第十通）

一念に弥陀をたのみたてまつる衆生を、光明のなかにおさめとりて、信ずるこころだにもかはらねば、すてたまはず、といふこころなり。　（五帖目、第六通）

結

さて以上で山本角太夫初演の『石山開帳』並びに『石山後日　れんげ上人』が、本願寺蓮如の伝を中心的な素材として用いていること、および『石山後日　れんげ上人』が延宝五年五月に刊行された『蓮如上人御物語』を参照していることがほぼあきらかになったか、と思われる。このことを確認した上で、二点ふれておきたい。

まず第一点は、延宝期から蓮如讃仰の気運が興った、ということである。言い換えれば『石山開帳』の上演と『蓮如上人御物語』の刊行がほぼ同時であったことは、決して偶然ではないということになる。

蓋し、本願寺蓮如一代の事跡を縁起の形で享受する、ということが広く門徒の意識にのぼってくるのは、まぎれもなくこの延宝五年の『蓮如上人御物語』と延宝七年正月の『蓮如上人遺徳記』の刊行からである。要するにこれは、蓮如を中興の上人と仰ぐ門徒の意識の表面化であった。蓮如以後、実如・証如・顕如の時代は動乱のうちに明け暮れ、慶長七年二月実質的に東西分派して七十年、日常の安定と高度経済成長は必然的に歴史の確認へと門徒の心を動かしたのである。

因みに、延宝五年はあと二十年ほどで蓮如二百回忌、という時点である。この蓮如二百回忌から二百五十回忌にかけて、多くの蓮如伝が作られ蓮如伝はそれこそきらびやかな衣装を身に纏うことになる。二百五十回忌から三百五十

回忌にかけては、蓮如絵伝の隆盛期であった。三百五十回忌を中心とする数十年は、蓮如絵伝の絵解の黄金期である。このように、蓮如讃仰のうねりは蓮如の四百回忌すなわち明治の後半まで続く。この二百五十年に及ぶ蓮如讃仰のうねりの初発の時期が、まさにこの延宝期である。

結果から見れば、山本角太夫はこの大きなうねりの始まりを敏感に感じ取ってこれに乗じた、ということになる。

今一点、山本角太夫と宇治加賀掾が厳しい対抗関係にあったことは、既に先学の御研究によって明らかである。

宇治加賀掾はこの時期、仏光寺が第三祖に数えている源海の伝『源海上人』を上演する。筆者は従来、加賀掾と仏光寺との間に何らかのつながりがあったのではないかと些か穿った見方をしていたが、今回山本角太夫所演の本願寺蓮如伝が確認できたことによって、やや異なった見解を持つに至った。

すなわち、宇治加賀掾が仏光寺の三代目に目を付けたのは、山本角太夫が本願寺の八代目をとりあげたということに対する対抗意識の表れではないか、言い換えれば角太夫の本願寺蓮如伝上演が加賀掾の仏光寺源海伝上演の契機となった可能性を推測してもよいのではないか、と考えるに至ったのである。対抗意識が素材の選択に影響を及ぼした一例、と考えられようか。

補注

① 大学堂刊『古浄瑠璃正本集　角太夫編　第一』による。節符を省略した。

② 大谷大学図書館蔵『蓮如上人御物語』（延宝五年刊）による。現行の字体に改め、振仮名を省略し、私に空白を設けた。

③ 同朋舎刊『真宗史料集成　第二巻　蓮如とその教団』による。

④ 同右。

⑤ 大学堂刊『古浄瑠璃正本集　角太夫編　第二』による。節符を省略した。

⑥ 平凡社刊　東洋文庫　三四五　出雲路　修　校注　『御ふみ』による。振仮名を省略した。

⑦ 同補注③。

（本学教授　国文学）